

縄文時代と弥生時代の大きな違いは二つある。一つは本格的な農耕の有無、もう一つは戦争の存否だ。縄文時代にも傷を受けた人骨はあるから、争いは存在したといえる。だが、争いという行為が社会のなかで正当化され、宗教などと結びついて美化されていた証拠が出てくるのは弥生以降だ。戦士や英雄の存在を物語る武器副葬、武器形の祭器がしめす武力の崇拜、いかめしい防御施設に反映された共同防衛の意識などがそれだ。「縄文の戦争」が取りざたされているが、それが単なる争い以上に社会的に正当化され、思想の一部として人びとの観念を支配していた証拠は、縄文にはほとんどない。武力の正当化や美化が戦争の前提だとすれば、やはり戦争は弥生に始まったといえる。

農耕が始まると戦争が起

武力なき「縄文」なぜ消えた

学際的研究による戦争起源の探究を

このという図式は、考古学者の故・佐原真氏が説いたように世界共通で、弥生はその一例だ。農耕と戦争とのこの因果関係は、もちろん経済的理由にもよるが、

本質的には、人間の心性の基礎的な共通基盤に根ざすものだろう。すなわち、農耕は自然を、戦争は人間を、ともに物理的に統制する手段だ。その根底には「意のままにする」という、周囲の人間も含めた環境への対し方にみられる、人間という生物独特の生存戦略がある。それを突きつめたところに権力や国家が出てくるのだ。

従来は社会発展史観では、人類社会は、狩猟採集の単純な社会から、農耕による複雑高度な文明社会へ向けて「進化」した、ととらえてきた。そして、文明の指標である王権や統治組織、軍隊や都市などの形成

と維持に、戦争が大きな役割を果たしたといわれる。戦争は、人類社会「進化」の要件のごとく考えられてきたのだ。



三重の濠（ほり）をめぐらせた弥生時代の田和山遺跡（松江市）。深い濠で囲まれた環濠（かんこう）集落は弥生時代の戦争の激しさを示すものとして—97年、筆者撮影

ものとは別の方向に「進化」していく可能性をもっていたのではないか、という考えかたが出てきた。縄文は、こうした社会の典型だ。そ

しかし近年、狩猟採集の社会にもまた、農耕社会とは異なった側面で高度に複雑化したものがあり、それらは、私たちが文明とよぶ

界の経験的知識に裏うちされた技術体系などが、複雑に統合された社会だった。同じように、農耕や武力に基礎をおかずして高度に複雑化した社会は、現在の考古学者の想像を超えるようなスタイルのものも含めて、地球上の各地にかつてはたくさん存在していた



松木 武彦

重要なのは、過去数千年のあいだに、こうした社会のほとんどが、農耕や戦争を軸とする「意のまま」志向の社会に同化して消滅してきたことだ。縄文社会の大部分は、中国文明を源とする農耕社会に吸収されて弥生社会へと大転換した。同じことは新旧大陸各地で

起こったし、欧米の先進「文明」がアジア・アフリカ・アメリカ各地の部族社会を「教化」して取りこむ近代の動きも同様の図式だ。いまや、「意のまま」志向の社会のみが地球上をほぼ覆いつくし、それら同士の間が烽火している。

考古学による戦争起源の探究は、これまで経済的な側面を重視するものが多かった。だが、それだけでは十分でない。戦争という行為が、人間の生物学的特質とどう関係するのか。そして農耕・戦争・支配を軸とする諸社会が、そうでない諸社会を圧倒してはびこるに至った真の理由は何か。これらの問題について、考古学が、生物学・人類学・社会学などの諸分野と連携して、本格的な解明に着手するべきときを迎えている。（まつき・たけひこ 岡山大学助教、考古学）